

＜巻頭言＞

画期的な段階を迎えたパーリ研究 ——「新訳南伝大蔵経」の必要性和 片山一良教授の先駆的偉業——

前 田 恵 學

最近、タイ国の国家事業とも言うべき、ダンマ協会 (Dhamma Society) の手に成るローマ字版パーリ三蔵40巻と索引資料同じく40巻が出版された。昨年9月10日には大阪の四天王寺で、12日には名古屋の日泰寺で、タイ王国チュラポン王女殿下ご臨席の下で三蔵贈呈式が行なわれ、すでに贈呈されていた東京では、13日に東大農学部講堂で講演会が開催された。この三蔵は、『仏紀2500年大結集ローマ字版三蔵』 (*Mahāsaṅgīti Tipiṭaka Buddhavasse 2500* または *The Buddhist Era 2500 Great International Council Pāli Tipiṭaka*) と呼ばれる。

従来アジア各地の上座仏教圏では、それぞれの国字による大蔵経 (三蔵と注釈類等) が出版されている。研究者は、タイ文字、ビルマ文字、シンハラ文字、カンボジア文字やデーヴァナーガリー文字等による文献・古写本を苦心しつつ参照してきた。ただ中心となってきたのは、19世紀以来、イギリスで計画的に出版されてきた Pali Text Society 版であり、最近では第六回結集ビルマ版も重視されてきたが、国字版は傍らに参照されるだけのことが多かった。

しかるに今回のタイ国ダンマ協会のローマ字版パーリ三蔵は、仏紀2500年を記念して、ミャンマーのヤンゴンで行なわれた第六回結集版を中心に置きつつ、18種に上る各国字版や PTS 版を比較参照して、50名のコンピューター技術者を動員し、3年かけて3回にわたり異読・異解を厳密に訂正し、

その完成を期したもので、今後長くパーリ研究の基本的文献となるものと思われる。

従来、PTS 版を中心としてパーリ研究が遂行せられ、その主力である三蔵や注釈書の出版や翻訳・研究等、大きな成果をあげてきた。しかし『批判的パーリ語辞典』(CPD)の出版事業の中断に見られるように、パーリ三蔵の学問的な文献研究は、今日次第に鎮静化してきているようである。代りに抬頭してきているのは、上座仏教の瞑想の実践を中心とする生きた伝道活動である。そのためパーリ三蔵に対する一般的関心が高まっているのである。今回タイ国から日本の諸大学へのパーリ三蔵の贈与に当り、仲介の尽力をされたのは、日本テーラワーダ仏教協会(会長小西淳一氏)であった。

今日、アジアにおいてアジア人の手に成る、言うなれば、もともとあるべき形のローマ字版パーリ三蔵の出版を見たことは、パーリ研究の今後に大きな刺激を与える新しい段階を迎えたように思われる。ただし、目下のところ、諸大学等の研究機関に贈られはしたものの、自由に購入できるようになってはいない。このことは、日本の各地に所在して研究しておられる研究者にとっては、困ったことかと思われる。しかしインターネットなどを用いる形で利用できるそうである。今後の研究の展開を期待したい。

ここへ来てその実現が要請されるのは、新ローマ字国際版パーリ三蔵の翻訳である。言わば、「新訳南伝大蔵経」である。これによって原始仏教・上座仏教に対する一般の理解が、格段に進むことが期待される。それと共に思われるのは、片山一良教授の『長部』『中部』等の美事な翻訳である。これはビルマ(ミャンマー)第六結集版を底本とする翻訳でPTS版もまた主要な国字版も随時参照されている。しかも訳註(脚註・補註)にはその説明のために *aṭṭhakathā* から *tīkā* まで参照してある。正に第六結集ビルマ国字版からの新訳で、今回のローマ字版と底本は同じである。片山教授は、我々がローマ字版の出現など予想もしていなかった時代から翻訳事業を進められていた。伝統を重んじ、真摯な態度で翻訳に従事され、聖者としての釈尊がよく現代に具現されている。真に先駆的偉業と言うべきである。